九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『笈の小文』旅中書簡小考

河村，瑛子

https://doi.org/10.15017/4742080

出版情報：雅俗. 18, pp.73-87, 2019-07-16. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

KYUSHU UNIVERSITY

◉スポットライト

『笈の小文』旅中書簡小考

河村　瑛子

一　はじめに

「ふみ」という言葉について、『御傘』（慶安四年刊）は次のように規定する。

文　恋に一、旅に一、文学に壱。玉章三句の内なり。誹には恋にても旅にても文学にても三の外に今ぶんと声に読て有也。皆折をかゆる也。新式に文学とあるは、たとへば、からの文をまなぶ、文の巻々など有事也。（『御傘』「ふ」部）

「ふみ」は『連歌新式』以来、連俳において一座三句物とされ、恋・旅・文学（学問の意）の素材として百韻に各一度ずつの使用が認められる。恋の情趣を表すのに書簡が用いられ、学問に書物としての「ふみ」が必要とされるのと同様に、手紙は、旅情を詠うのに欠くことのできない素材であった。

連歌においては『連珠合璧集』（文明八年以前成）「旅の心」に「たより文」が挙げられ、『拾花集』（明暦二年刊）、『竹馬集』（明暦二年～寛文頃刊）には「文」の寄合語に「旅なる人」が見える。俳諧でも『せわ焼草』（明暦二年刊）「文（ふみ）」条に「旅便（たより）」、『初本結』（寛文二年刊）、『便船集』（寛文九年刊）、『俳諧類船集』（延宝四年刊）の「文」（ふみ）条に「旅」が掲出される。実作例を挙げれば、『菟玖波集』巻十七・羈旅連歌には、

誰にかやどをかりはきぬらむ
文を見て旅の心はしられけり　　浄永法師

と、旅先から届いた手紙を見て、旅人の心を思いやる句が見え、『応永二十五年十一月二十五日和漢聯句』、

帰ならひかいそぐ雁がね　　基蔵主
伝書郷思切（書を伝へて郷思切なり）　　椎（椎野）

は、旅人が手紙（「書」）を送るにつけて郷愁を募らせることを詠む。

このように、詩歌の世界においては伝統的に、旅人は書簡をしたためる存在として描かれるが、その営みを現実のものとして実践したのが芭蕉であった。芭蕉の真簡は二百通以上が知られ(1)、「元禄の三大家の中ではずば抜けて多」(2)い。それ以前の俳人に目を向けても、『貞徳家集』（古典文庫、一九七五）に収録される貞徳書簡は四十四通、『西山宗因全集』第四巻（八木書店、二〇〇六）・第六巻（同、二〇一七）に収録される宗因書簡は計三十一通であるから、やはり数量においては突出している。就中、全体の約三分の二以上が真蹟で伝わることは特筆すべきであり、それは芭蕉の文学史的評価の一貫した高さを示す

とともに、芭蕉の「全人的な文学営為」において「書簡による伝道」(3)が重きをなしたこと、芭蕉が「形見」としての墨跡を重視する志向を有したことをも物語る(4)。

芭蕉書簡の資料価値については既に諸書に論じられているが、特に旅中の書簡は「『笈の小文』の旅についても、あるいは元禄七年夏西上の旅についても、もしそれに関係のある手紙が伝存しないとしたら、現在判明している事実のうち、少なからざる部分が未知のままで放置されねばならなかった」(5)と指摘されるように、細かな動静を知りうる点で貴重である。特徴的なのは、これらが伝記研究に資するのみならず、しばしば作品、つまり文学としての「ふみ」の生成や解釈の問題と結びつく点で、『笈の小文』について言えば、貞享五年四月二十五日付惣七宛芭蕉・万菊（杜国）連名書簡が、紀行本文と内容を共有する例などが代表的であろう。

加えて注意すべきは、新出資料の出現である。『校本芭蕉全集第八巻書翰篇』（富士見書房、一九八九）、『校本芭蕉全集別巻補遺篇』（同上、一九九一）、『芭蕉全図譜』（岩波書店、一九九三）、『新芭蕉講座第七巻書簡篇』（三省堂、一九九五）、今栄蔵『芭蕉書簡大成』（角川学芸出版、二〇〇五）、田中善信『全釈芭蕉書簡集』（新典社、二〇〇五）などの主な書簡集成は、その時点での最新の成果を反映しており、さらに、近年においても、複数の真簡の存在が報告される(6)。伝記・作品研究を推し進めるための新たな手がかりが提供され続けていることは、稀有な資料状況であるといえよう。

次掲の書簡もそのような手紙の一つであり、近時、玉城司「新出芭蕉真蹟資料三点――初期懐紙一点と書簡二点」(7)によって報告された。前半部分を欠き、宛名・日付も備わらない断簡であるが、内容から『笈の小文』旅中の執筆と知られる。左に全文を掲げる（論述の都合上、書簡に通し記号を付す）。

〈書簡A〉

珍重過当之至、且巻一歌仙并ニ発句、感吟不斜候。三吟之内、名乗有之上、批判も心にまかせず候故、他の判、除候而、貴丈子御佳作而已、判書印候。尚白丈、玉句、尤珍作共、見え申候。拙者、爰元今月廿過（ママ）発足、伊賀路へ入申候。道寄もむつかしく候間、随分直ニ伊賀へと心ざし候。鳴海熟田之間ニして、暫ハ被留候半かと存候。伊賀より以書状可得御意候。何とぞ越年、湖水の曙をも見申度大望ニ候。心ざしの通ニ物ごと相叶かしと存候。先兼而ハ物毎むつかしく候間、尚白丈御両人のミニ而、他のさた必御無用ニ被成可被下候。以上

玉城氏前掲論文は、本簡が「尚白と親しい近江俳人から、歌仙一巻の評点を依頼された」際の返信であり、「宛先は尚白と親しかった千那か青鴉」、「貞享四年十一月下旬から十二月上旬の間に名古屋あたりで執筆されたもの」と推測する。

ここで『笈の小文』の旅程を確認しておきたい。貞享四年十月二十五日、江戸を発足した芭蕉は、同年十一月四日に鳴海知足亭に到着、七日まで同地で過ごし、八日は熱田桐葉亭へ移動、翌九日晩に越人を伴って知足亭へ戻り、十日朝より越人と共に伊良湖の杜国を慰問する。十一月十六日に鳴海知足亭へ帰着後、二十日まで同地に滞在、二十一日～二十四日は熱田に留まり、二十五日は名古屋の荷兮亭に移り、同月末まで名古屋に逗留する。十二月一日～二日には熱田に滞在、

同月三日より名古屋に移動し、十二月十日あまりに同地を発って伊賀へと向かう。当初の心づもりでは、十一月上旬に尾張を発ち、伊賀へ向かう予定であったが(8)、杜国訪問と尾張俳人の歓待により、結局、一か月半に及ぶ長逗留となった。この間の句作の成果は『笈の小文』に記されるほか、真蹟や『如行子』をはじめとした関連資料に残されており、多忙を極めたことが確認できる(9)。

右の書簡は「爰元今月廿過発足」と今後の予定に言及しており、旅の実情を示す点で注目されるが、この記述は、右の慌ただしい旅程のどの時点のものなのだろうか。その時期と場所とを今少し絞り込むことができたならば、書簡の文面の機微と旅の実情をつぶさに把握し、本簡の資料価値をより正確に位置づけることができるように思われる。ひいては、『笈の小文』や、旅中の句作を精密に理解する糸口ともなろう。そこで本稿では、当該書簡と同時期の芭蕉書簡を味読し、尾張滞在中の芭蕉の動静の細部を吟味しつつ、本簡の成立時期について検討する。さらに、それを踏まえて『笈の小文』所収の芭蕉発句「旅寝してみしやうき世の煤はらひ」の解釈についても考察を加えたい。

二　尾張滞在中の芭蕉書簡

まず、右掲の書簡の内容をやや丁寧に整理しておきたい。

冒頭では、先方から送られた三吟歌仙について「作者の名前があることを理由に断りながらも、依頼者に限って、批評を書き記し」(10)ており、依頼者と尚白の句に「珍作」があったと褒める。

「拙者、爰元今月廿過発足、伊賀路へ入申候」が、今月二十日過ぎに当地を出立して伊賀へ帰郷する予定を記すことから、本簡の執筆は二十日以前、某月上旬ないし中旬と考えられる。続く「道寄もむつかしく候間、随分直ニ伊賀へと心ざし候」は、先方からの手紙に、近江へ誘引する記述があったことを示す。芭蕉はそれを謝絶し、伊賀へ直行する旨を告げる。

「鳴海熟田之間ニして、暫ハ被留候半かと存候」の「熟田」は尾張国熱田を指し、「熱」を「熟」に作るのは芭蕉の書き癖である(11)。「ニして」は、ここは場所を指示する「にて」と同意で(12)、東海道を西上しつつ伊賀へと向かう際、鳴海・熱田間で門人によってしばらく引き留められるであろう、の意。執筆場所の「爰元」は鳴海以東の東海道沿いと考えられ、そのような場所としては、定宿である鳴海の知足亭が第一に想定される。十一月二十一日以降、芭蕉は知足亭に投宿しておらず、かつ、「師走十日余」（『笈の小文』）には名古屋を発足しているので、本簡は十一月上旬から中旬、鳴海での執筆であることがほぼ確定される。

続いて「伊賀より以書状可得御意候」と、伊賀より手紙を送ることを伝え、以下、近江立寄を辞することへ配慮した文言が綴られる。「何とぞ越年、湖水の曙をも見申度大望ニ候」の「何とぞ」は「湖水の曙」以下にかかり(13)、伊賀で越年後、来春には近江を訪れたいとの「大望」を述べ、「心ざしの通ニ物ごと相叶かし」と、その実現を願う。

「先兼而ハ物毎むつかしく候間」以下では、本簡の内容を、宛先の人物と尚白との間でのみ共有し、他に漏らさぬよう伝えている。宛先が千那であるか、尚白と近しい青鴉（青亜）(14)であるかを判断する決定的な根拠はないものの、芭蕉との個人的な書簡の応酬の残る千那や尚

白を差し置いて、青鴉にこのような文面を送ることは、いささか想定しにくいようにも思われる。あるいは千那宛と考えるほうが穏当であろうか。

以上を踏まえて執筆時期をさらに絞りたい。『笈の小文』の旅で芭蕉が鳴海に滞在する機会は三度あり、（一）江戸より来着した十一月四日～七日、（二）同月九日夜に熱田より戻ってから、翌十日朝に伊良湖へ発足するまで、（三）同月十六日に伊良湖より帰着してから、同月二十一日に熱田に移動するまでの間である。本簡に伊良湖行きへの言及がないことや、歌仙添削に要する時間などを考慮すると、（二）は除外してよいと思われるので、執筆時期は（一）か（三）のどちらかとなる。「廿過発足」の記述から、（三）の場合は十一月二十日以前と考えられる。

執筆時期を確定するには、尾張滞在中の芭蕉の動向を把握する必要がある。その資料として、同時期の書簡を検討したい。芭蕉が尾張で認めた書簡は、本簡を含め現在四通が知られる。通し記号を付して示せば、本簡（書簡A）、貞享四年十一月二十四日付寂照（知足）宛書簡（書簡B）、同年十二月一日付落梧・蕉笠宛書簡（書簡C）、同年十二月十三日付杉風宛書簡（書簡D）であり、書簡B～Dは『校本芭蕉全集』に収録される。以下、執筆順に内容を検討する。なお、私に傍線を施し、尚々書は冒頭に二字下げで示した。

〈書簡B〉

尚々今日は御入来可被成と相待候処、近比〳〵御残多奉存候。かへす〴〵此度万事御懇意忝難尽候。

為御見舞三良左衛門殿被遣、誠辱奉存候。今日は若御出可被成かと御亭主共ニ相待居申候処、御残多義ニ御坐候。先以此度は緩々滞留、さま〴〵御懇情御馳走、御礼難申尽候。はいかい急ニ風俗改り候様ニと心せかれ、御耳にさはるべき事のミ、御免被成可被下候。され共風俗そろ〳〵改り候ハヾ、猶露命しばらくの形見共思召可被下候。①なごやよりも日々ニ便被致候間、明日荷兮迄参可申候ハんと存候。②持病心気ざし候処、又咳気いたし、薬給申候。なごやニても養生可成事に御坐候間、明日比なごやへと存候。一、先日笠寺まで御連中御送被成、御厚志候こと、可然御礼御意得奉頼候。如意寺様猶又よろしくたのミ奉存候。③追付発足、山中より以書状具可申上候。二三日此かた両吟致、大かた出かし候。出来候ハヾ被懸御目候様ニ、早々以上

霜月廿四日　芭蕉翁

寂照居士 几下

（貞享四年十一月二十四日付寂照宛芭蕉書簡）

右は、十一月二十四日、熱田で執筆された知足宛の一通である。原簡は所在不明で、『伊羅古の雪』（宝暦三年刊）に真蹟が模刻される。本文前半では鳴海滞在時の厚遇に対する礼を述べ、後半では鳴海連衆による見送りを謝し、尚々書でも重ねて知足への感謝を述べる懇切な手紙である。また、「はいかい急ニ風俗改り候様ニと心せかれ」以下の二文は、「知足を自分の目指す新風に導こうとして、芭蕉がかなり厳しく指導したこと」[15]を示しており、新風伝道の実態が知られる。

旅程に関する記述を確認すると、傍線部①「なごやよりも日々ニ便被致候間」以下では、名古屋から立寄を求める手紙が到来するのに応え、翌二十五日に名古屋の荷兮亭へ移ることを報じる。そのような「便」としては、十一月二十二日付芭蕉宛越人書簡が伝わる[16]。同書

簡中に「私ハ大かた御越被遊候節はかねて存居申候得共」とあるように、越人は芭蕉の名古屋到来の時期を予め把握していたものの、待ちかねた名古屋門人が芭蕉の滞在先へ押しかけようとするので、早期の来名を懇望する文面である。当該書簡は、伊良湖からの帰着後、越人がはじめて書面で意を得ようとしたものと思しく[17]、名古屋への訪問は、十一月十六日までに、ある程度は具体化していたと考えられる。

傍線部②「持病心気ざし候処」以下では、「持病の腹痛に悩まされ」[18]、そのうえ咳気まで生じて服薬したこと、名古屋へ移った後も引き続き養生するつもりであることを記す。諸注が指摘するように、熱田滞在中の句「翁心ちあしくて欄木起倒子へ薬の（事）いひつか（は）すとて／薬のむさらでも霜の枕かな」（『如行子』）と相応する。こうした体調不良も滞在が長引いた一因であった。

傍線部③「追付発足、山中より以書状具可申上候」では、「山中」（伊賀上野）より手紙を出す旨を記すことから、「追付発足」は、名古屋へ移った後、間もなく伊賀へ出発する心づもりであることを示す。書簡Aで報じた予定よりも、やや遅れを生じているように見える。

〈書簡C〉

尚々枝柿一籠、うるか一壺被懸芳慮忝、尤賞玩仕候。其外連衆中より荷兮叟迄御懇書御音信、忝奉存候。③少持病すぐれ不申候故、一紙如此御坐候。御立候跡ニ而一会御坐候。越人より重而□□□□□候。

翰墨辱拝披、今度者早々御見舞被成被下、千里ヲ遠しとせずの御心指、御厚意、過分至極奉存候。①来春、初夏之節、必其御地御尋可申候。

一、素堂餞別、一字二字忘候。言葉書なども御坐候。失念いたし候。江戸より書揃よせ可申よし申候故、うつし不参候。②猶来春可得御意候。頓首

十二月朔日　　芭蕉桃青（書判）

落梧雅丈

蕉笠雅丈

（貞享四年十二月一日付落梧・蕉笠宛芭蕉書簡[19]）

次に検討するのは、十二月一日、熱田での執筆と思しい一通である。宛名の落梧・蕉笠は岐阜の俳人であり、前月二十六日には名古屋滞在中の芭蕉とともに「凩の寒さ重ねよ稲葉山　落梧」を発句として七吟三十句を巻いた。本簡は岐阜へ戻った二人からの礼状と進物に対する返信である。所在不明ながら、真蹟の写真が伝わる（『芭蕉全図譜』三二九）。

冒頭の「今度者早々御見舞被成被下」以下は両名の名古屋来訪に対する挨拶であり、『笈の小文』の「此間美濃・大垣・岐阜のすきものとぶらひ来りて、歌仙あるは一折など度々に及」と相応する[20]。『校本芭蕉全集別巻補遺篇』が、落梧・蕉笠の名古屋訪問は「芭蕉の岐阜来遊を促すところにあり、書中「其外連衆中より」の「御懇書」というのも同様、岐阜連衆の来遊嘆願状だったであろう」と指摘するように、芭蕉は岐阜への来訪を懇望され、傍線部①「来春、初夏之節、必其御地御尋可申候」は、それに対する反応である。来春以降に訪問する旨を告げて年内の立寄を謝絶する点が書簡Aと共通する。傍線部②「猶来春可得御意候」は来春書面で連絡する意と思われ、これも書簡Aと通う。また、傍線部③「少持病すぐれ不申候故」では書簡Bと同様に持病に言及する。諸書が指摘するように『如行子』当日条に、如行・

桐葉との三吟を試みるも「ばせを心地不快ニして是にてやみぬ」と半歌仙で中断した記事があり、体調不良が続いていたことが確認できる。

〈書簡D〉

尚々甚五兵衛殿・又兵衛殿・仙化へ無事之事御しらせ可被成候。

其元別条無御坐候哉、承度奉存候。寒気之節、屋布御勤相調候哉、無心元存候。①先書ニも申進じ候通、霜月五日鳴海迄（ママ）つき、五三日之中、いがへと存候へ共、②ミや・なごやよりなるみまで、見舞あるハ飛脚音信さしつどひ、わりなくなごや引越候而、師走十三日、煤はきの日まで罷有候。③色々馳走不浅、岐阜・大垣などの宗匠共も尋見舞候。④隣国近き方へまねき、待かけ候へバ、先春ニ〳〵と云のばし置申候。⑤なるみ此かた二、三十句いたし候へバ、能事も出不申候。只まを合たるまでに御坐候。

旅寝してみしやうきよのすゝ払

極月十三日　　ばせを

杉風雅丈

（貞享四年十二月十三日付杉風宛芭蕉書簡）

最後に検討するのは、伊賀上野へ出発する直前の十二月十三日に名古屋で執筆された書簡である。宛先は杉風で、尾張滞在中の近況を報告し、年中行事の煤払の当日、「その日の旅中感を文末の発句に託す」[21]。末尾の発句は、『笈の小文』に、

師走十日余、名ごやを出て旧里に入んとす。

旅寝してみしやうき世の煤はらひ

として入るもので、右の書簡が初出である。

田中氏前掲書が「本簡は『芭蕉全図譜』（平成5）にも収録されているが私は模写だと思う」と述べるように、本簡は真蹟の写しと考えら

著作権保護のため図は非表示

図一　書簡D（部分）[22]

図二　とし明候へバ[23]

図三　用意なく候へバ[24]

図四　上京可致候へ共[25]

図五　あぐみものニ而候へ共[26]

図六　書簡D（部分）

図七　古郷[27]

図八　古郷[28]

れる。そのため難解な部分が散見するが、ひとまず『校本芭蕉全集』所収の釈文によって掲出した。難読箇所の一例を示せば、傍線部⑤「なるみ此かた二、三十句いたし候へバ、能事も出不申候」は、鳴海到着以来の発句の出来映えを反省する一文であり、「能事も出不申候」の直前は、逆接の接続詞が期待されるところである。当該箇所の「候へバ」は「候へ共」の誤写を考慮すべきではなかろうか。問題の部分（図一）および、芭蕉自筆資料の「候へバ」（図二・図三）と「候へ共」（図四・図五）とを見比べると、字形が類似しており、そのことを示唆するように思われる。また、傍線部④「隣国近き方」（図六）もやや熟さぬ表現であり、田中氏前掲書は「隣国近江方」の読みを提示する。近江俳人からの誘引を示す書簡Aの存在を考えれば、その可能性は十分に考えられる。一方、「隣国」との相応や、字形の類似（図七・図八）を勘案すると、あるいは「隣国近郷方」の写し崩れかとも思われる。

次に内容について確認する。傍線部①「先書ニも申進じ候通、霜月五日（ママ）鳴海迄つき、五三日之中、いがへと存候へ共」[29]とあるように、鳴海へ到着した当初は十一月上旬に同地を発足して伊賀へと向かう予定であり、本簡以前にも杉風にその旨を報じていた（その書簡は現存しない）。ところが、宮（熱田）や名古屋の門人による訪問や来簡が相次いだために「わりなく」名古屋へ移り、煤払が行われる十二月十三日まで名古屋に逗留することとなった（傍線部②）。これは書簡Bや前掲越人書簡の内容と附合する。傍線部③「色々馳走不浅、岐阜・大垣などの宗匠共も尋見舞候」は、書簡Cや『笈の小文』の本文と相応する。また、傍線部④「隣国」以下で、門人の誘引に対し、来春訪問する由を伝えて謝絶したことを述べる点は、書簡A・Cと共通する。

傍線部⑤では、尾張滞在中の自作に対する不満を述べ、殊更に「只まを合たるまでに御坐候」の一文を添える。野田千平「新出杉風宛芭蕉書簡」[30]が「謙虚な挨拶ともとれるが、俳諧連衆に対して適当に調子を合わせたまでの意味にも解される。とすれば芭蕉を歓迎した連衆に対して冷淡な言葉である」と指摘するように、この文言には、前述の「わりなく」と同様、謙遜のみにとどまらない響きが僅かに認められる。右に述べ来たったように、尾張滞在中の芭蕉は、体調不良の中、帰郷予定を幾度も変更しつつ、門人の熱意に応えて乞われるままに俳席を重ねた。そのような実情が、かかる辟易気味の内省に結びつくのは自然なことであったように思われる。書簡Bが示唆するように、当地の門人はいまだ芭蕉の満足するようなレベルには達しておらず、そうした事情も背景にあったのであろう。

以上を踏まえ、改めて冒頭に掲げた書簡（書簡A）の成立時期を検討したい。本簡は十一月下旬に鳴海を発足する予定を告げており、書簡Dに記される来鳴当初の計画とは齟齬する。十一月上旬に予定が二転三転した可能性は排除できないものの、書簡Bに示された行程との整合性を勘案すると、本簡は、芭蕉が伊良湖から帰着した十一月十六日から同月二十日の間の執筆である蓋然性が高い。

書簡Aを含めた右掲の書簡群について、主に旅程に関わる内容を時系列順に整理すると次のようになる。

○十一月上旬…鳴海を数日中に発足し、伊賀へ向かう予定を杉風に報じる（書簡D）。

○十一月十六日以前…名古屋立寄の予定を越人が把握する（越人

書簡）。

○十一月十六日～二十日…鳴海を同月二十日過ぎに発足し、伊賀へ直行する予定を報じる。近江来遊の誘いを謝絶し、来春の訪問を約す。鳴海・熱田間で門人に引き留められる可能性を示唆（書簡A）。鳴海滞在中、知足らに厳しい指導をした（書簡B）。

○十一月二十四日…十一月二十五日頃、門人の要望により熱田から名古屋へ移ること、現在体調不良であり、名古屋で引き続き養生すること、名古屋へ移動後まもなく伊賀へと発足する予定を告げる（書簡B）。

○十二月一日…岐阜への立寄を謝絶し、来春・来夏の訪問を約す。体調不良を報じる（書簡C）。

○十二月十三日…杉風に十一月初旬以来の状況を報告。鳴海滞在中、熱田・名古屋門人の要望により、やむなく鳴海から名古屋へ移り、煤払の日まで逗留したこと、隣国の門人からの来遊嘆願に対し、来春訪問する旨を伝えて謝絶したこと、鳴海到着この方の自詠への反省を伝える。書中「旅寝して」句あり（書簡D）。

このように、芭蕉は、十一月初旬に鳴海に到着して以来、速やかに尾張を発ち、伊賀へ直行する意志を持ち続けており（傍線部）、その意向を実現するために、殆どその場しのぎの対応ながら、諸方の門人の誘引を繰り返し謝絶していた（破線部）。かかる一貫した意思を持ちながら、尾張門人の歓迎と、体の不調（波線部）とが相俟って次第に出発が延び、意に反して長期滞在を余儀なくされたのであった。このような事情は、書簡Aの出現と、その執筆時期の判明によって、従来よりいっそう明確に把握される。

三　「旅寝して」句について

以上のような事情を踏まえると、芭蕉発句「旅寝してみしやうき世の煤はらひ」の解釈は、若干変わってくるように思われる。

まず、句形について確認しておく。当該句は、杉風宛書簡が初出で、『笈の小文』に採られるほか、近年報告された真蹟懐紙「木のもとに」等発句五句切(31)、『あら野』（元禄二年序刊）「旅」部等にも同形で入る。『泊船集』（元禄十一年刊）、『宇陀法師』（元禄十五年刊）は上五を「旅をして」に作るが、『校本芭蕉全集別巻補遺篇』が「『泊船集』等の句形はおそらく杜撰であろう」と述べるように、誤伝と思しいので、『笈の小文』の句形に即して考察を進める。

当該句は、「浮世と自分の境涯と二つの世界の、まったく対蹠的な違いの認識の上に発想され」(32)、「芭蕉作品にしばしば見られる」「浮世の外に生きる自己の確認」(33)であることが指摘される。「世間は煤払いで忙しく、旅寝を続ける私はそれを眺めるばかりだ」(34)など、芭蕉が漂泊の旅人として煤払を捉えると理解する点で、諸注は概ね一致する。

先行研究を見渡すと、「旅寝してみしや」は、「旅を続ける中で（中略）見かけたことだ」(35)、「旅に明け暮れる自分は（中略）ただ傍観者として眺めて通り過ぎるばかりだ」(36)のように、「旅寝する身の軽さを言うこと」を「主眼」(37)と捉える理解に添い、丁寧に言葉を補って解される。大方の理解として首肯されるものの、幾つかの疑問も残る。まず、「旅寝」は旅そのものとほぼ同義に解されるが、上五が「旅をして」ではなく「旅寝して」とあることの意味については十分に説明されていないように思われる。また、「みしや」には様々な訳語が宛てら

れ、芭蕉の恬淡とした姿勢が強調される傾向にあるが、これは「旅寝」の解釈と連動するものであり、再考の余地があろう。加えて、芭蕉が煤払を目にすることになった経緯を鑑みれば、この句を純粋な嘱目句のごとく解することの妥当性についても留意する必要がある(38)。以上のような問題点を踏まえて、注釈的検討を加えたい。

芭蕉発句における「旅寝」は、「たびねして我句をしれや秋の風」(濁子本『甲子吟行画巻』跋)のように、旅一般とみて差し支えないものも僅かにあるものの、基本的には、その場に宿泊することを意識して用いられる(39)。『笈の小文』旅中吟における「旅寝」は、当該句のほかに三例が確認でき、その傾向が顕著である。まず「寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき」の初案、

よしだに泊る夜

寒けれどふたり旅ねぞたのもしき　ばせを　(真蹟懐紙)

は、越人の同道により、本来「身は風葉の行末なき心地」(『笈の小文』)のする侘しい「旅寝」でさえも「たのもし」く感じられることを詠い、それにより越人への親愛の情を示す。前書から知られるように、右の「旅寝」は旅先で宿泊する意に重きが置かれる。また、同年、名古屋の一井亭で詠まれた、

十二月九日一井亭興行

たび寝よし宿は師走の夕月夜　芭蕉　(『熱田三歌仙』)

も、「宿」を殊更に詠み込むように、「旅寝」はその場に宿泊滞在することを含意し、亭主への謝意を「たび寝よし」の語に込める。また、貞享五年春、吉野に赴いた際の句、

やまとのくにを行脚しけるに、ある濃夫の家にやどりて一夜をあかすほどに、あるじ情ふかく、やさしくもてなし侍れば、

はなのかげうたひに似たるたび寝哉　ばせを　(真蹟小懐紙)

も、農夫の家に一夜の宿を借りることを「たび寝」と表現し、挨拶句とする。これらと同様に、「旅寝して」句の「旅寝」も、旅を続けることのみならず、名古屋での逗留をも意識した措辞であったのではなかろうか。

次に「みしや」という表現について確認する。芭蕉作品における「みしや」は、当該句の他に次の一例が知られるのみである。

九月三日詣墓

みしやその七日は墓の三日の月　(『笈日記』)

この句は、元禄六年秋、嵐蘭の初七日に、その墓前で詠んだ追悼句であり、「あなたの初七日の夜空にかかる三日月を、あなたは泉下から眺めただろうか」(40)などと解される。諸注「みしや」の主体を嵐蘭とし、疑問の意と捉えるが、やや不審が残る。芭蕉作品において「見る」に助動詞「き」が後続する例は、数こそ少ないものの、なべて主体の直接経験を表すためである。たとえば元禄元年冬、越人に贈られた、

二人見し雪は今年もふりけるか　芭蕉　(『庭竈集』)

の「二人見し雪」は、『笈の小文』の旅で杜国を慰問した際、芭蕉が越人と共に実見した雪を指す。また、発句ではないが、

たてよこの五尺にたらぬ草の戸をむすぶもくやし雨なかりせば

とよみ侍るよし、兼て物がたりきこへ侍るぞ、見しはきゝしに増りて、

木啄も庵は破らず夏木立　　芭蕉書　　（真蹟懐紙）

の「見し」も、芭蕉が雲岸寺を実見したことをいい、伝聞に勝るその際の感懐が「木啄も」句に結ばれる。このような用例に照らせば、故人嵐蘭を主体とする動作に「みしや」を用いるのは、必ずしも自然な措辞とは思われない。

廣田二郎『芭蕉と古典――元禄時代――』[41]が、「『新古今集』巻十六、雑歌上の紫式部歌（第五句を「夜半の月かな」として『百人一首』にも入る。）（中略）から、詞句・措辞とそのイメージ・トーンを得て来ている」と指摘するように、当該句は『新古今集』（雑歌上・一四九九）所収の次の古歌を核とする。

はやくよりわらはともだちに侍りける人の、としごろへてゆきあひたる、ほのかにて、七月十日の比、月にきほひてかへり侍りければ　　紫式部

めぐりあひてみしやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かげ

夜更け過ぎに沈む十日月と幼友達の退出とを重ねて惜しむ式部歌を踏まえ、当該句では、十日月よりもなお早く沈む三日月に寄せて、嵐蘭の死（「雲がくれ」）を惜しむ[42]。

当該歌の本歌取は、貞門以来頻繁に行われ、

かちまけを見しやそれ共われ相撲　　堺　松安　（寛文十年跋刊『続境海草』）

真赤いに見しやそれ共若楓　　鳥取（寛文十二年跋刊『時勢粧』）

など、「みしやそれとも」から「わ」を語頭に持つ言葉を導くのが典型的な作例である。芭蕉の「みしやその」句は、これらよりもやや複雑で、「みしや」と指示語「その」、および「月」との組み合わせによって式部歌を示す。「みしや」は古歌を想起させるべく文句を借りたものであるから、「や」は必ずしも疑問と捉える必要はない。「や」を詠嘆として理解するならば、「みしや」の主体も芭蕉と考えるのが自然であろう。すなわち、「みしや」は、墓前で月を目にした際の芭蕉自身の情動を、切字「や」によって表したものと解される。

本歌取の発句という特殊な例ではあるものの、右の用法を踏まえると、「みしや」は旅を続ける中での一瞥というよりはむしろ、場に臨んで対象を実見した際の、強い感懐を表出するものではないだろうか。こうした理解は「旅寝」がその場での逗留を含意することとも呼応する。「うき世の煤はらひ」を「旅寝してみ」たことの意味は、改めて吟味する必要があるように思われる。

俳諧独自の季題である煤払（煤掃）は、古俳諧以来、盛んに取り上げられ[43]、

家々はしはす丶はきの時分哉　　岡村氏　吉次　（明暦四年跋刊『鸚鵡集』）

宿を出ていづくもおなじす丶払　　同（大坂）　忠由　（寛文六年跋刊『遠近集』）

と、十二月十三日には世間がおしなべて煤払をするさまが詠われる[44]。

いっぽう当該句は、煤払を「うき世」の営みと位置づけ、「旅寝」という超俗的な世界と対照させる点で、貞門以来の典型的な読みぶりとは異なる[45]。類似の芭蕉句には、「さみだれを」歌仙（元禄二年成）、

雪みぞれ師走の市の名残とて　　曽良

煤掃の日を草庵の客　　芭蕉

があり、煤払の喧噪を無縁のものとする隠士の姿が詠われる[46]。また、蕉門俳人の作例には『俳諧勧進牒』（路通編、元禄四年跋刊）下・「燭寸」五十韻、

地金まづしき鎌倉の鍛冶　牛竿
世を遁て煤払日も忘れけり　岩翁

に、「世を遁れ」て暮らす「鎌倉の鍛冶」が煤払の日を失念することを詠む例があり、やはり「煤払」を隠者志向と対照的な営みと位置づける。

このように、芭蕉とその周辺では、「煤払」が俗事を象徴する素材として用いられたことが確認できるが、そうであるならば、当該句の「煤はらひ」に、ニュアンスの重複する「うき世」を加えるのは何故か。これについては、『笈の底』（信天翁著、寛政七年序）当該句注に示唆的な記述がある。

旅に出てこそ暫しも世の煤に染む事も少く、世の塵を余所に見るとの意也。旅の心の自然に清浄なる趣を述たり。此吟浮世の煤と続たる詞の余情、名誉と云べし。

煤払を「余所に見る」と解する点は新注と同じだが、「煤はらひ」に「世の煤」や「世の塵」、つまり世塵の意味を認め、その余情が「浮世の煤と続たる詞」に込められると解釈する点が重要である。たしかに芭蕉句には、「煤」にそうした意味合いを託した例がある。

つくしのかたにまかりし比、頭陀に入し五器一具、難波津の旅亭に捨しを破らず、七とせの後、湖上の粟津迄送りければ、是をさへ過しかたをおもひ出して哀なりしまゝに、翁へ此事物語し侍りければ、

これや世の煤にそまらぬ古合子　風羅坊　（『俳諧勧進牒』上）

前書によれば、路通が筑紫行脚の際、頭陀袋に入れた五器を大坂の旅宿に捨て置き、七年後、それが粟津まで送られた。路通がこのことを芭蕉に語ったところ、「これや世の」の一句を得たという。「世の煤」は「世俗の煩わしさを煤にたとえた表現」で、「これに「煤払」の意をきかせ、季語とする」[47]ものである。

もっとも、煤払で払われる「煤」や「塵」を俗世や世塵に重ねる例は、芭蕉以前より散見する。たとえば、

かくぞしたき心のちりを煤払　季吟[48]（延宝四年刊『続連珠』）

は、煤払で塵を払うように、「心のちり」（煩悩や雑念）を払いたいと詠み、また、

塵の世をいとふ迄こそ煤払　同（堺）重明　（『続境海草』）

は、日頃は「塵の世」（俗世）を厭うて暮らす者までも、この日は煤払いをするとし、隠者風の人物が、世俗から完全には離れられぬ姿を戯画化する。

煤はきや塵のうき世の竹箒　大坂白甫　（寛文十一年序刊『落花集』）

は、「煤払」と「竹箒」、「竹」と「世（節）」、「竹」と「煤」（煤竹による）といった縁語を駆使しつつ、「煤はき」と「塵」との関係から「塵のうき世」[49]の語を導く。

七賢やよごれ浮世のすすはらい（ママ）　松水　（延宝八～九年刊『談林功用群鑑』）

は「竹（林）」のヌケであり、煤払を通じて「よごれ」た浮世と隠者とを対置する。

このように、貞門・談林の古俳諧において、煤払は世俗の煩わしさ

を連想させる語として用いられた。芭蕉の煤払詠はこうした先例に連なるものであり、「うき世の煤はらひ」に世塵の意味を認める『笈の底』の指摘は首肯される。すなわち、当該句の「煤はらひ」は、単なる年中行事ではなく、抽象的な意味合いを帯びたものと考えられる。

以上の考察を踏まえると、当該句における「旅寝」と「うき世の煤はらひ」との対比は、いっそう際立つこととなる。前掲『笈の底』が「旅に出てこそ暫しも世の煤に染む事も少く」と述べるように、「旅寝」は本来、世俗の塵埃を厭う営みである。「旅寝」に身を置きながら、「うき世の煤はらひ」を「みし」こと、即ち世塵に接することは、「旅寝」の希求するところとは相反するものであった。

「旅寝」の志向と現実との落差に焦点を当てた芭蕉句には、『野ざらし紀行』の、

大垣に泊りける夜は、木因が家をあるじとす。武蔵野を出る時、野ざらしを心におもひて旅立ければ、

しにもせぬ旅寝の果よ秋の暮

がある。同紀行の冒頭句「野ざらしを心に風のしむ身哉」と呼応する一句であり、客死の覚悟を標榜して旅に出たものの、結局は「しにもせ」ず生きながらえた現実を詠い、「安堵と自嘲の入りまじった」(50)響きを有することが指摘される。「旅寝」は旅そのものの意に重ねて、木因亭での宿泊が意識され、芭蕉をもてなした「木因に対する挨拶の意」(51)を含む。当該句の初案「死よしなぬ浮身の果は秋の暮」(『後の旅』)が、我が身を「しなぬ浮身」と表現することからも、「しにもせぬ旅寝」が、死を前提とする「旅寝」と現実との矛盾を諧謔的に描こうとしたことが確認できる。

「旅寝して」句についても、これと同様の構造が認められる。「旅寝してみしや」という芭蕉の詠嘆は、俗世間から遁れることを求めて旅に出ながら、逗留先でかえって浮世の営み――世塵を強く連想させる「煤はらひ」を見ることとなった、その矛盾を苦笑し、かつ興じたものではなかっただろうか。

『更科紀行』の旅中吟「木曽のとち浮世の人のみやげ哉」から知られるように、芭蕉は旅人としての自身を「浮世」の外の存在と位置づける。しかしながら一方で、

露とく〳〵心みに浮世すゝがばや　（『野ざらし紀行』）

のように、「自分がなお塵俗そのものであると内省」し、「「うき世」を煩わしく、汚れた俗界として意識し、身辺および心中の塵を払い、清く保つことを強く希求」(52)する一面もある。書簡にも「幻住庵上葺被仰付候半由、珍重奉存候。うき世之さた、少も遠きハ此山のミと、折々の寝覚難忘候」（元禄五年二月十八日付書簡）など、「うき世」に泥みがちな現状を認識し、そこから遁れることを願う言辞が見える。当該句で「うき世の煤はらひ」を見つめる芭蕉の姿勢は、後者に近いように思われる。

「旅寝して」句は、純粋な嘱目によるものではなく、予想外に長引いた「旅寝」の産物である。かかる事情は、「うき世」からの脱却を志向しながら、「うき世の煤」に触れることになってしまった、という苦笑を重層的なものにしている。とりわけ杉風宛書簡においては、出発遅延に対する不本意さを述べた末に当該句が記され、穿った見方をすれ

ば、初出時には、門人への対応や病臥など、世事に拘うことへの自嘲めいたニュアンスを認めることも可能かもしれない。しかし、仮に実情がそうであったとしても、それは公にされるべき性質のものではなかった。『笈の小文』本文には門人との雅交の成果のみが綴られ、書簡群から垣間見えるような不如意は看取されない。『笈の小文』における当該句を読解する上で、その背景にある長期滞在を過剰に否定的に捉えるのは適切ではなかろう。

このことを重く見るならば、当該句の挨拶性にも思いを致す必要があるように思われる。「旅寝」を詠んだ芭蕉句には挨拶吟が散見し(33)、前述のとおり、当該句以外の『笈の小文』旅中の「旅寝」吟は、全て門人への謝意や親愛の情を示すものであった。このような傾向を鑑みれば、当該句の「旅寝」に尾張俳人への配慮を認めることは、さほど唐突ではない。「旅寝して」句において、意に沿わぬ滞留は、風狂心の高まりゆえの長逗留として肯定的に捉え直されたのではなかったか。当該句に詠われた苦笑は、かかる「旅寝」がもたらした詩情として理解される。それは、俳諧熱の高揚のただ中で芭蕉を歓待した門人への挨拶として、いかにも相応しいものであったように思われる。

注

(1) 『校本芭蕉全集第八巻書翰篇』(富士見書房、一九八九)、『校本芭蕉全集別巻補遺篇』(同上、一九九一)は、計二三一通(うち真簡一九九通、追考十三通、参考十七通、存疑二通)を収録し、『芭蕉全図譜』(岩波書店、一九九三)は、真蹟とされる一四二通の図版と解説を収め、『新芭蕉講座第七巻書簡篇』(三省堂、一九九五)は、『校本芭蕉全集』所収書簡の真偽考証を行い、新出書簡を合わせて真簡二一四通を収録する。

(2) 田中善信『全釈芭蕉書簡集』(新典社、二〇〇五)「はじめに」。同書は、西鶴の現存書簡が七通、『近松全集』(岩波書店)に収録される近松の書簡が十通であることを示す。

(3) 塩村耕「近世における写本と版本の関係は」『古典文学の常識を疑う』勉誠出版、二〇一七。

(4) 拙稿「「かたち」考」『国語国文』八六―五号、二〇一七。

(5) 『校本芭蕉全集第八巻書翰篇』「概説」(荻野清執筆)。

(6) 学会報告や学術論文で紹介されるほか、『芭蕉―広がる世界、深まる心―』(名古屋市博物館、二〇一二)、『芭蕉―三十年間の新出作品を中心に』(柿衞文庫、二〇一四)、『芭蕉　新出作品を中心にⅡ』(同上、二〇一六)、『芭蕉の手紙』(同上、二〇一八)などの展覧会図録に紹介される。

(7) 『連歌俳諧研究』一三〇号、二〇一六。

(8) 貞享四年十二月十三日付杉風宛芭蕉書簡。

(9) 大安隆・小林孔・松本節子・馬岡裕子『笈の小文の研究　評釈と資料』(和泉書院、二〇一九)「旅程と旅中句(その異同)一覧」参照。

(10) 前掲玉城論文。

(11) 注9前掲書六五頁「熱田」の注に、この表記が「芭蕉特有の異体字」であること、『野ざらし紀行』自筆本、「京までは」等三句懐紙、自筆書簡(『芭蕉全図譜』三二一・三八六)の例があることを指摘する。

(12) 『奥の細道』の旅中、玉志亭での出来事を「あふみや玉志亭にして」(「初真桑」等四句懐紙)と記し、桃印の病没について「草庵にしてうせたる事」(元禄六年四月二十九日付荊口宛芭蕉書簡)と記すのも同様の用法である。

(13) 「何とぞ今来年江戸にあそび候ハヾ、又〳〵貴境と心指候間」(元禄四年十一月十三日付曲水宛書簡)の「何とぞ」が「又〳〵貴境と心指」を修飾するのと同様の用法である。

(14) 青鴉(青亜)は貞享三年尚白歳旦引付や、尚白編『孤松』(貞享四年序刊)に入り、田中氏前掲書は「尚白の門人と思われるが詳細は未詳」とする。荻野清『猿蓑俳句研究』(赤尾照文堂、一九七〇)は、青亜が『続虚栗』(貞享四年十一月十三日奥刊)に入集し、かつ、貞享五年の尚白歳旦帳に見え

ぬこと、『猿蓑』に尚白による青亜追悼句「乳のみ子に世を渡したる師走哉」が載ることから、貞享四年十二月没と推測する。

(15) 田中氏前掲書。

(16) 名古屋市博物館蔵。注6前掲図録『芭蕉――広がる世界、深まる心――』に真蹟図版と翻字を収録する。早く『もくろく　紫水北田家所蔵品入札』（東京美術倶楽部、一九三四）に写真が載り、飯田正一『蕉門俳人書簡集』（桜楓社、一九七二）、『校本芭蕉全集第八巻書翰篇』等に翻刻が紹介される。

(17) 越人書簡の冒頭に「先日以後、御物遠に奉過候」の一文があり、かつ、伊良湖からの帰鳴後、本簡執筆の間に芭蕉と越人とが対面した記録が残らないことから、このように推測される。なお、この越人書簡の冒頭文は端裏を表装する際に切断され、本紙裏面にある（注6前掲図録『芭蕉――広がる世界、深まる心――』。同図録以前の翻刻は、この冒頭文を具えない）。

(18) 『校本芭蕉全集第八巻書翰篇』。

(19) 『校本芭蕉全集』の本文を『芭蕉全図譜』等によって一部改めた。□で示した難読部分について、今氏前掲書は「御申遣可参」、田中氏前掲書は「申之可被参」とする。

(20) 注9前掲書が「大垣の如行や岐阜の落梧と蕉笠らをいうのであろう」と指摘する。

(21) 『新芭蕉講座第七巻書簡篇』。

(22) 『芭蕉全図譜』三三〇。図六も同書による。

(23) 元禄二年三月二十三日付落梧宛芭蕉書簡（『芭蕉全図譜』三四三）。以下、図五まで、見出しの傍線部について図版を掲出する。

(24) 元禄元年九月十日付紺屋市兵衛（卓袋）宛芭蕉書簡（『芭蕉全図譜』三三六）。

(25) 貞享三年十月二十九日付寂照宛芭蕉書簡（『芭蕉全図譜』三二六）。

(26) 注24に同じ。

(27) 「時節嘸」歌仙巻子（『芭蕉全図譜』三）。

(28) 芭蕉自筆自画『甲子吟行画巻』（『芭蕉全図譜』七五）。

(29) 諸注が指摘するように『下里知足日記』によれば、鳴海に到着したのは前日の十一月四日であり「霜月五日」は芭蕉の記憶違いか。

(30) 『連歌俳諧研究』五四号、一九七八。

(31) 注6前掲図録『芭蕉――三十年間の新出作品を中心に』に図版を収録する。

(32) 山本健吉『芭蕉全発句』講談社学術文庫、二〇一二。

(33) 雲英末雄・佐藤勝明訳注『芭蕉全句集』角川ソフィア文庫、二〇一〇。

(34) 同右書。

(35) 堀切実・田中善信・佐藤勝明編『諸注評釈新芭蕉俳句大成』明治書院、二〇一四（藤井美保子執筆）。

(36) 新潮日本古典集成『芭蕉句集』新潮社、一九八二。

(37) 注32前掲書。

(38) なお、貞享元年の『野ざらし紀行』の旅においても、芭蕉は尾張で煤払の日を迎えている。ただし、この時に煤払を詠んだ句は確認できない。

(39) 「旅寝」を詠んだ芭蕉発句のうち、本稿本文中に取り上げないものを左に示す。「都いで、神も旅寝の日数哉」（『雨の日数』）は、十月に自らが旅したことに加え、「旅館のあるじ」（前書）への挨拶を意図して「旅寝」を用いる。「夜着一つ祈出して旅寝かな」（真蹟）は、三河鳳来寺門前に一宿の折、夜着を世話した門人白雪への謝意を示す。堅田滞在中の「病雁の夜さむに落て旅ね哉」（『猿蓑』）が「夜さむ」を、『奥の細道』旅中の「名月の見所問ん旅寝せむ」（『荊口句帖』）が「名月」を、「高水に星も旅寝や岩の上」（真蹟）が「星」を詠み込むように、「旅寝」は夜、その場に留まることを含意する。延宝期の「よるべをいつ一葉に虫の旅ねして」（『東日記』）は、水上の桐一葉に乗る虫の姿を、舟に起居する「旅ね」と見なす。

(40) 注35前掲書（倉本昭執筆）。

(41) 廣田二郎『芭蕉と古典――元禄時代――』（明治書院、一九八七）「元禄四年十月～七年十月の作品と古典」。

(42) 『匠材集』三に「雲がくれ　人逝去の事也」とある。廣田氏前掲書は「式部歌の「夜半の月かげ」を、よりはかない「三日の月（影）」ととらえなおすことによって、嵐蘭との死別の哀痛悲傷がより深く」表現されることを指摘する。

(43) 「鼻の色はうつりにけりなす、払　伴野一世」（寛文十一年刊『ひともと

草』）など、煤払に勤しむ人々の風貌をユーモラスに描くものや、「戸障子もつてほうと倒れり／煤はきは目もあかぬ程間しや」（寛文六～十一年刊『続独吟集』由健独吟）のように、慌ただしさに着目するものなどが典型的な描き方である。鬼貫『独ごと』（享保三年刊）に「煤払ひは、人の顔みな埃におぼれて誰とも更に見えわかねば、声をすがたに呼かはすもおかし」とあるように、こうした詠まれ方は以後の俳諧にも引き継がれる。

(44) 芭蕉晩年の「煤はきは己が棚つる大工かな」（『すみだはら』）も、こうした前提をもとに、普段は他人の家の造作に携わる大工が自宅のことに出精する様を詠む。「煤掃の道具おほかた取出し／むかひの人と中なをりけり」（『俳諧録』）のように慌ただしさの中での人情の機微を付けた例もある。

(45) 旅中の煤払を詠む芭蕉句としては、ほかに「煤掃は杉の木の間の嵐哉」（『己が光』所収、前書「旅行」）がある。

(46) 深沢眞二「「さみだれを」歌仙注釈」（『旅する俳諧師　芭蕉叢考二』清文堂出版、二〇一五）は、類例として『続の原』「何方に行てあそばん煤はらひ　挙白」（十二番・左）の芭蕉評「す、はきの日の遊び所を侘たるも、優にして艶也」を挙げ、「世俗の習いである「す、はきの日」には風雅に遊ぶ者は行き場をなくす」ことを踏まえた評であることを指摘する。

(47) 注33前掲書。

(48) この句は『詞林金玉集』（延宝七年序）に散佚書『夜の錦』（寛文六年成）所引句として収録される。

(49) よく知られた例としては、謡曲『忠度』の「泊りも果てぬ旅の慣ひ、憂き身はいつも交はりの、塵の憂き世の芥川、猪名の小篠をわけ過て」がある。

(50) 尾形仂『野ざらし紀行評釈』角川書店、一九九八。

(51) 岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』明治書院、一九六七。

(52) 米谷巌「芭蕉の「うき世」観――『貝おほひ』より『笈の小文』の旅に至る――」『国語教育研究』二十号、一九七三。

(53) 注39参照。

〔付記〕引用本文は、特に断らない限り、芭蕉作品は『校本芭蕉全集』（書簡の訓点は省略した）、和歌は『新編国歌大観』により、その他の作品で翻刻・影印が備わるものはそれにより、その他は原本によった。適宜、濁点、句読点等を加除した。本稿は、名古屋大学国語国文学会平成二十九年度春季大会シンポジウム「文学としての手紙」における研究発表の一部にもとづく。ご教示を賜った先生方に深謝申し上げます。また、本稿はＪＳＰＳ科研費18K12286の研究成果の一部である。